



東京での仕事を辞めて新潟にUターンして5年。近ごろは方言というか地元言葉が飛躍的に、スラスラと出てくるようになって、そんな自分が面白くて嬉しい。

というのも、東京暮らしのころは、「新潟」とか「長岡」とか「花火」とか、地元まつわる言葉にとにかく飢えていたから。

街ゆく人たちのほとんどがおそらく新潟の人、長岡の人ということに、今でも時々感嘆するほどだ（笑）。

帰郷したてのころに感じた、地方ならではの不足感や物足りないような感覚は、割と早いうちに「田舎ならではの面白さ」に昇華してしまった。

自分はそういう性質なのだろう。

昨年の秋口のこと。

休みで家にいると呼び鈴が鳴った。宅急便か回覧板か、「はいー」と出ていって一瞬たじろぐ。

玄関に立っていたのは地元の先輩（後輩もいた）。

過去に何をされたわけではないが、中学時代の思い出の一つとして「怖い先輩」というカテゴリが私の中にはある。
それは良しとして、見れば分かる。

これは、消防団の勧誘だ・・・。

地元で馴染んでいく自分に喜びを感じていたけれど、そういえば先輩や後輩とは高校卒業して上京して以来というかそれ以前からもほとんど付き合いがなかった。
久しぶりに見る顔に「(なんて名前だっけこの人・・・)」と申し訳なくて笑顔が引きつる。

「〇〇君、いきなり悪りいね。見ての通り消防団のがあけど。どうら？」

語尾の「があ」とか「ら」とか心地よい言葉が、そう年の変わらない先輩から放たれ感動すら覚える。
これぞ私が目指すべきネイティブの姿。
さほど話も聞かずに「入ります」と頭を下げて入団が決まった。

4月に入団式と歓迎会、それから月1、2回程度の頻度で訓練や集まりがあった。
今は7月の頭にある演習に向けて毎晩練習の日々が続いている。
最初のうちは拍子抜けするくらいだったが、今はさすがに忙しく、仕事やプライベートとの調整が難しい。
しかし、これが終わるとまた月1、2回程度の集まりになり、そのうち忘年会か新年会をやって年度末を迎える。
というのが1年の流れらしい。
今は忙しく、まだ半ばだが、足を運ぶたび面白さを感じる。
「こんな人もいたっけ」と、新しい関わりができるのが、私にとって嬉しいこと

なのだ。

「早くあがりたい（退団、卒業したい）」というのが、消防団の会話の中では合
いの手のように言われるが、私はそうも思わない。

「団」によるかもしれないが、少なくとも無理は強要されない。
大人だけで運動会か体育の授業をやっているような、ざっくばらんな雰囲気
居心地は悪くない。
友人と顔を合わせる場が増えて良かったと思うくらいである。

地元の集まりというのは、どうも面倒なものと嫌煙される傾向があると思う。
仕事やプライベートと折り合いをつけるのが大変かもしれないし、消防となれ
ば危険も伴う。

しかしとにかく、仲間が大勢いるのを見ると安心するのだ。

「一人じゃない」と心強く思えることだけでも、例えば消防団に足を踏み入れる
価値はある。

地元のコミュニティにどっぷりとつかってみようと思った。